

幼児にとって「鳩」は「鳥」よりやさしい

もう一つ、別の例を挙げてみましょう。

「鳩」「鳥」「九」 この三つの漢字の中で、幼児がいちばん覚えやすいのは、どれだと思いますか？

これも実際に試していただければわかることですが、正解は「鳩」。そして、次に覚えやすいのが「鳥」で、いちばん覚えにくいのが「九」です。一見、簡単そうに見える「九」が難しく、いちばん難しそうな「鳩」が幼児にとってやさしいのはなぜでしょうか？

先ほどお話しした「複雑な形のほうが記憶の手がかりも多い」というのも、理由の一つとすることができます。しかしそれ以上に大きいのは、「鳩」が幼児にとって具体的な生きいさとした内容をもっているということです。鳩を知らない子どもはいません。ですから、一度「鳩」という字を覚えたら、頭の中でしっかりと自分の知っている鳩のイメージと結びつき忘れることがないのです。

ところが、「鳥」という名前の鳥はいませんから、幼児ははっきりと具体物を思い浮かべることができません。まして、「九」という数の概念は、ひじょうに抽象的であるため、幼児にとってはもっとも覚えにくいものなのです。

つまり、幼児にとって、漢字のやさしさ、難しさとは、その内容(=意味)がありありとイメージできるかどうかであり、字の外見上の難しさとは関係ないのです。別の言い方をすれば、いくら見た目が難しそうな漢字でも、幼児がはっきりとその実体をイメージできる言葉であれば、

簡単に覚えられるということです。

このことを最初に私に教えてくれたのは、以前私が小学校の教員をしていたときに担任したY君です。彼は、一年生を終えても、ひらがなが一字も読めるようにならない極端な“劣等生”でした。いちばん簡単に思える漢字の「一」や「二」も読めません。

ところが、そのY君が「雲」や「雪」の字なら、決して間違えることなく読んでしまうのです。あまりにも自信満々に読むものですから、ある日、私は「雪」という字を示して、「本当はこっちが『くも』という字じゃなかったかい？」などと、少々意地悪な質問を試みたのですが、Y君の自信は少しも揺らぐことはありませんでした。

毎日のように眺めている雲や大好きな雪は、Y君にとっては、まさに生きいきとした実体であり、そのイメトシがいったん漢字としっかり結び付いたら、もう間違えようがなかったのです。